死んだ王妃は二度目の人生を楽しみます❶

～お飾りの王妃は必要ないのでしょう？～

なか
Naka

Regina BUNKO

CHARACTERS
登場人物紹介
シルウィオ
アイゼン帝国の皇帝。
なにもかもつまらないと思っていたが、
カーティアに出会って変わっていく。
グレイン
シルウィオの護衛騎士。
うっかりしているところもあるが、
実力は帝国一。
シュルク
アイゼン帝国に並ぶ
大国カルセインの王子。
政治能力の高いカーティアを
妻に迎えようとしていた。
ヒルダ
アドルフの側妃。
自分に愛を奪われても健気に
アドルフに尽くす
カーティアを馬鹿にしている。
アドルフ
グラナートの国王で、カーティアの夫。
カーティアとは幼い頃から一緒で、
かつては確かに愛し合っていた。
今はヒルダにぞっこん。
カーティア
冷遇の末、病で命を落とした
グラナート王国の王妃。
三年前の世界で目覚め、
孤独な死を避けるために国を出た。
毎日を楽しく過ごすことに前向き。

目次

死んだ王妃は二度目の人生を楽しみます１
～お飾りの王妃は必要ないのでしょう？～　7

書き下ろし番外編
幸せを望んだのは　363

死んだ王妃は二度目の人生を楽しみます１
～お飾りの王妃は必要ないのでしょう？～

プロローグ

「はぁ……はぁ……」

暗い部屋に一人きり。

もう何日も陽の光を浴びていない寝具で横になり、荒い呼吸を繰り返す。

日々弱っていく身体を労わる者はいない。額に置かれた手ぬぐいは既に乾き切っていた。

「は……はは」

思わず、笑いがこぼれる。

こんな扱いを受けている私が……この国の王妃なのだから笑わずにはいられない。

夫であり、この国の王でもあるアドルフ・グラナートは私を愛していない。

挙式後に側妃として娶ったヒルダにご執心だ。

かつては愛し合っていたはずの私とアドルフだったけれど、ヒルダが来てからは顔を

合わせることすらなくなった。

国王の愛を失った正妃。それが、貴族たちが私に下す評価だ。

私だって、黙ってこの状況を受け入れた訳ではない。

少しでもアドルフの視界に入りたくて、彼から丸投げされた政務や外交に勤しんだ。

頑張っていれば、いつか彼が振り向いてくれると信じていた。

しかし……その努力は無駄だった。

「だ……れか。く、薬……を」

咳き込み、かすれた声で呟いても、外にいる侍女はクスクスと笑うだけ。

「ふふ、薬だってさ。行ってあげなさいよ」

「いやよ。だって、アドルフ陛下から言われたもの……看病は必要ないって。死んでくれた方がいいみたい」

嘘だ――そう思いたくても、アドルフから愛されていないことなんて、私自身が誰よりも知っている。

彼のために人生を捧げたのに、その結果がこれだ。

彼を含め、このグラナート王国の皆が孤独な王妃を嘲笑う。

「……なんだったのよ、私の人生って」

胸に締め付けるような痛みが走り、涙が流れた。
身体から力が抜けて、目の前が真っ暗になっていく。心も、視界も、絶望で塗り潰された。
あぁ……今になってようやくわかった。私の二十五年の人生は、最悪だった。
悲惨な運命を嘆きながら、私の命の灯は消えていった。

第一章　それでは、さようなら

目を開くと……見慣れた天井が視界に入った。
私――カーティアは寝台から起き上がりつつ、鏡を見つめる。
波打つ金色の髪に、闇夜のような黒の瞳……顔に何度も触れて確認する。
間違いない、私だ。
刺すような胸の痛みも咳もなく、火が出そうな程高かった体温も正常だ。
なに……夢でも見ているの？
湧き上がる疑問に首を傾げていると、扉が乱雑に開かれた。声かけもなく入ってきた

仏頂面の侍女が水の入った桶と薄汚い布を置く。
「どうぞ！　朝の支度用です！」
「……」
いつも通りの侍女の様子に、言葉が出ない。
一体なにが起こっているのか。
なにもわからないながらに、身体は習慣だった行為を自然となぞる。
凍てつくような水の冷たさに手をかじかませながら、濡らした布で顔を拭く。
食卓に向かうと、私の拳よりも小さなパンが置かれていた。
広い食卓に一人で座り、硬く味もしないパンを食す。
「ドレスにお着替えください」
どうやら今日は、私の二十二歳の誕生会らしい。
正装でないと駄目だ、と侍女がドレスを運んできた。
着つけを手伝ってくれるが、コルセットの紐を意図的にきつく締め付けられる。
痛い……ということは、やはり夢ではない。
「ふん……冷遇されている王妃の侍女なんて最悪だわ」
「本当、私たちまで笑われているわよ」

部屋の外から、あえて聞かせるように侍女たちが話す。着つけをしている侍女が諌(いさ)めることもない。

ドレスで着飾った後、髪は自分で結い上げた。

しかし……二十二歳の誕生会って、どういうこと？　なにが起こっているの？

夕刻、私の誕生会には多くの貴族たちが集まっていた。

しかし、主役である私の傍らには誰もいない。

一人で壁際に立ち、遠巻きな嘲笑(ちょうしょう)の視線にただ射貫かれている。

「ふふ、今日もアドルフ陛下はいらっしゃいませんね」

「当然よ。カーティア妃は愛されていませんもの」

「恥ずかしい、私なら生きていられませんわ。側妃に愛を奪われるなんて、みっともないもの」

周囲を見渡し、私はふぅーと息を吐く。

少しずつだけど、今の状況がわかってきた。

祝われてはいない誕生会を終えて自室へ戻ると、机の上には大量の書類が置かれて

いた。

やはりいつも通りの光景だ。アドルフの政務が私に回されただけ。

その書類仕事を、いつもは寝ずにこなすのだけど……

考えを整理するため、今日はなにも手をつけずに寝た。

翌朝、昨日と変わらぬ身支度を終える。今日は正装の必要はないから、一人で簡素なドレスを着た。

昨夜の政務をしなければならないという考えを振り払い、私は王宮内を歩き回った。

やはり、記憶と変わらない光景だ。

綺麗な花の咲き誇る庭園や、窓から見える景色。刺さるような侍女たちの視線、嘲笑、陰口。

そして……

「どうして、お前がここにいる？」

冷たく、突き放すような声色。

視線を上げれば……彼がいた。

落ちかけの紅葉のような赤茶の髪に、氷のような蒼色の瞳。

その瞳で私を睨みつけているのは、私の夫で……国王のアドルフ・グラナートだ。

かつては彼を愛し、彼に愛されたいと焦がれていた。
「あら？　カーティアではないですか」
隣の女性が私の名を呼ぶ。
珍しい薄紫色の髪に、琥珀色の瞳に浮かぶ嘲(あざけ)りが、端麗な顔立ちを歪めていた。
自信満々の笑みと共に、見せつけるように彼に抱きついている彼女は、側妃のヒルダだ。
「政務はどうした？　それが唯一、お前にできることだろう？」
「ふふ、アドルフの言う通りですわ。出歩いている暇などないのでは？」
冷たい対応も、今は気にならない。
記憶の中と同じかどうか確かめるために、沈黙したまま二人を見つめた。
「いやだ、気味が悪いわ。アドルフ、カーティアが喋ってくれません」
「放っておこう、ヒルダ。反論の言葉もないのだろう」
歩き出したアドルフは、私とすれ違う際に小さく呟いた。
「お飾りの王妃らしく、俺たちの愛の邪魔にならぬように尽くせよ」
『お飾りの王妃』……か。
傷つきはしなかった。もう、前回の人生で流す涙は枯れきったから……

私室に戻る頃には、考えはまとまっていた。
二十五歳で病気により亡くなった記憶を持ったまま、私は過去に戻っている。
二十二歳の誕生会も、周りの様子も、記憶の通りだったので間違いない。
まさか、過去に戻るなんて……
死ぬ前の夢かと思ったけど、痛みはあったから現実のようだ。
今が二十二歳ということは、三年後に私は再び病気で孤独に命を落とすのだろう。
そう、今のままでは。
なら……やることは一つよね。
愛されないまま死んだ前回の人生、私の存在に価値などなかった。
ならば、再び与えられた三年の月日は、自由を満喫したい。
どんなに政務を肩代わりしても、彼がこちらを向くことなどない。
だから……彼への想いなど捨てて、後悔のないように自由に生きよう。
考えが決まれば、やることは一つだ。
まずは、さっさと王妃なんて肩書きは捨ててしまおう。
自身の行く末を決めた途端、憑き物が落ちたようによく眠れた。

「どうぞ！　朝の支度用です！」
翌朝、相も変わらず仏頂面の侍女が、強く桶を置き、汚い布を私に投げつける。
そんな彼女に問いかけた。
「一つ、聞いておきたいのだけど……貴方、どのような考えでそういう態度を取るの？」
「はい？　いきなりなんですか？」
「いや、単純な疑問よ。だって、私を害せば職を失うのよ？」
「……私たちの他に王妃様の世話をする者はおりませんよ？　クビにできるとお思いですか？」
あぁ、そういうことだったのね。
ずっと疑問に思っていたことの答えが出た。
冷遇されている王妃の世話人に立候補する者などいない、それが侍女たちをつけあがらせていたのだ。
答えは教えてもらったし、もういいか。
「ふ……ふふ」
「な、なにを笑っているのですか？」

「クビにできるかですって？　できるに決まっているじゃない」
「は、はい？」
「もう私の世話なんて必要ないわ。今のうちに荷物をまとめて新たな職でも探しなさい」
サッと青ざめた侍女は、なにを勘違いしていたのだろう。
私をなにも言わないお人形だとでもと思っていたのかしら。
吹っ切れた今、貴方たちなんて必要ない。
「あ……あの……」
「聞こえなかった？　さっさと荷物をまとめて出ていきなさい」
「ど、どうしたのですか、王妃様！　あの……申し訳ございません。ゆ、許してください！」
「伝わってる？　もう私の世話は必要ないの。王妃付きの侍女全員に伝えなさい、解雇だと」
私はこの後、王妃の肩書きを捨てる。
それに伴って侍女も暇（いとま）を出されるだろうから、早く次の職を探すように言ってあげているのに。

「申し訳ございません！　王妃様がそんなことをおっしゃると思わずに……つけあがっておりました！　気分を害したなら謝りますから！」
王妃付きの侍女は使用人の中でも高給をもらっている。辞めたくないのだろうけど、雇用の継続を迫られても私にできることなんてないわ。
「ねぇ？　何度も言わせないで。私の世話はもう必要ないの。さっさと出ていきなさい」
「ひ……ひぃ」
へなへなと座りこんだ侍女を放置して、机の上の書類を窓から投げ出す。
風に乗ってひらひらと舞い落ちていく紙を見つめながら、クスリと笑った。
よし、目障りな政務はこれで終わり。いい仕事ができた。
晴れやかな気分で部屋を出て、そのまま厨房へ向かう。
「っ……王妃さ、ま？　なぜここに？」
「はい、貴方クビね。さっさと出ていく準備をなさい」
「な……ほ、本当によろしいのでしょうか？　王妃様のお食事を作る者は私以外におりませんよ？」
「えぇ、別にいいわ」

質素なパンを用意するだけのコックなんていらないもの。
私は自分で朝食を作る。
死ぬ間際、私の身の回りの世話をしてくれた人はほとんどいなかったから、一通りの家事は身についている。
ベーコンエッグに焼いたパン。コーンスープを食卓に並べて、私はコックへ微笑んだ。
「見てわからない？　貴方は必要ないの」
「……あの、本気でしょうか？」
「何度も言わせないで、もう私に食事なんて作らなくて大丈夫。……ああ、そもそも作ってなんかいなかったわね。硬くなった古いパンを用意するだけだったもの」
「あ、あの……申し訳ございません。今度からは、王妃様の満足のいくお食事を」
「必要ないってば。何度も言わせないで？」
「わ、私は明日から……どうすれば……」
「さぁ？」
頭を抱えたコックから視線を外し、私はベーコンエッグを食べる。
うん、我ながら美味しい。
これから王宮を出たら鶏を飼おう。卵は毎日でも食べたいもの。

食事を終える頃、王宮内には様々な声が飛び交っていた。
「王妃様が乱心なされた！」
「お怒りの様子らしい！」
根も葉もないことを。私は乱心していないし、怒ってもいない。
むしろ清々しい気分だ。王妃を辞めると決めただけで、肩の荷がすっかり下りたのだから。
「お……王妃様！」
振り返ると、数人の文官が顔を引きつらせていた。手にはアドルフと彼らが私に丸投げしていた政務の書類を握っている。
さっき窓から捨てたものだ。
「おはようございます。皆様、どうされました？」
「こ、これらは貴方に任せた仕事のはずです！　窓から投げ出すなど、なんてことを！」
「政務に関しては、私が善意でやっていただけ。そもそもアドルフがやるべき仕事でしょう？　間違っていますか？」
「し、しかし……いきなりこの量を陛下に任せるなど」
この量と言うが、ここまで大量になったのは誰のせいだと思っているのか。

彼らに歩み寄り、書類を一枚ひらひらと見せつけるように揺らした。
「私の勘違いでなければ、貴方たちが処理すべき仕事もまじっていますよね。もう何年も押しつけられていたのを、私が知らないと思いました？」
「あ……あの……それは」
「大人しい王妃のままでいると思っていたようですが、もうその座にしがみつく気はありませんので」
どうせ王妃で居続けても惨（みじ）めに死ぬだけだもの。未練などない。
ありのままを伝えただけなのに、文官たちは一様に震えながら膝をついた。
「も、申し訳ございませんでした。確かにここ何年か、王妃様に政務を押しつけておりました。無礼は承知で、お任せしていた政務の詳細を……」
あぁ、何年も私に押しつけていたせいか。この人たちは仕事内容さえ忘れてしまったようだ。
「お断りします。別の方に頼んでみては？」
「そ、そんな！　王妃様として、この国のために行動してくださ――」
「その肩書きはもういらないの。じゃあね、今日はお昼寝でもさせてもらいます」
項垂（うなだ）れて助けを乞うように叫ぶ彼らに、私は振り返らなかった。

そのまま自室に戻り、昼寝のために寝台へ身を投げた。

せっかく気持ちよく寝ていたのに、夕刻に叩き起こされた。

とある一室に呼び出され、見覚えのある面々と顔を合わせる。

そこにいたのは、侍女長や文官長、王宮騎士団長に料理長。

アドルフはいないし、本来この場を取り持つべき大臣も、今は他国へ視察と名のついた外遊中だ。

だから、王宮の各部署の長だけが集まったのだろう。

彼らは、本当に私が王妃を辞する気かを何度も確かめてくる。

「ほ、本当に……王妃を辞めると？」

「だから、何度も言わせないで。王妃を続ける気はありません」

「アドルフ様に聞かれぬうちに考えを改めてください。言っておきますが、後悔されるのはカーティア様ですよ。いくら陛下が側妃様を寵愛（ちょうあい）されているとはいえ、癇癪（かんしゃく）を起こすなど……」

文官長が私を諌めると、周囲も同意するように頷く。

その中でただ一人、私は笑いが溢れて止められなかった。

「ふ、ふふ……あはは」

「な、なにを笑っておられるのですか！　これは決して脅しではありませんぞ！」

「まず一つ、貴方たちに私を止める権利はありません。先程からごちゃごちゃ言ってますけど、そのようなことを言える立場だと思っているのですか？　私を冷遇してきた貴方たちが」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた彼らに、言い逃れする時間は与えない。

間髪容れずに言葉を続ける。

「もう一つ、私はもうアドルフの寵愛など必要としていないの。そんなものを求めても、人生を無駄にするだけだから」

「なにを言って……私共は貴方のためを思って」

うんざりだ。昼寝を中断させられた挙句、意味のない問答を繰り返すだけ。

さっさと終わらせてしまおう。

「あぁそうだ。思いついた……貴方たちの下に仕える者は皆、私を冷遇していたわよね？　その責任を取ってもらいましょうか。そうしましょう」

「え……そ、それは……」

皆、一様に視線を逸らす。やはりこの話題なら黙ってくれそうだ。

「文官長は私に仕事を押しつけていた責、侍女長はろくな仕事をしない侍女を教育した責、他は……」
「あ、あの！　本気でおっしゃっているのですか⁉　確かに王妃の貴方には私たちを罰する権限があります。しかし、勝手をすればアドルフ陛下のお怒りを買うでしょう」
侍女長が言い返すと、項垂れていた面々が顔を上げる。
そうか……彼らを罰すればアドルフが激怒する。かつて愛していた、あの人が。
あぁ、それってつまり……とっても都合がいいわ。
「ねぇ、勘違いしているようね？」
侍女長の頬に手を当て、あえてにっこりと微笑む。
「それが望みなの、わかる？　不敬や無礼なんて関係ない。だって私、もう彼に愛されようなんて微塵も思っていないもの」
「あ、あの。じ、慈悲をいただけないでしょうか。私たちへ責を問う前に、今一度時間をください。必ず貴方を満足させてみせます」
「駄目。私の満足のいく人生のため、今までの責任を取ってね？」
侍女長は力なくへたりこんだ。俯く者や、謝る者、泣き出す者もいた。
今までぞんざいに扱っておきながら助けてほしいなんて、都合がいいと思わないのだ

ろうか。
その時、騒ぎを聞きつけたのだろうか、足音と共に冷たい声が響いた。
「なにをしている」
振り返ると、目当ての人物が立っていた。
アドルフ……かつて愛し、今は最も離れたい人物が。
「カーティア、これはなんの騒ぎだ？」
「私を冷遇した者たちを罰していたのです。いけませんか？」
「冷遇されていたなど初耳だが……お前ごときが罰するなど思い上がるな。勝手な行動はやめろ」
部署長たちは希望に瞳を輝かせた。にやにやと私を嘲るような笑みを見せつける。
「お前ごとき……ですか」
「あぁ、もはやお飾りの王妃でしかないお前に、そのような権限はない。もし勝手をすれば、お前など廃妃にでもしてやる」
え……嘘、嘘！　そんなの、すごく……すごく……！
「それは嬉しいです！　なら、もっと勝手にさせてもらいますね！」
「は……はぁ⁉」

王妃ってどうやったら辞められるのかわからなかったけど、アドルフから言ってくれるなんて、とても都合がいい。
なら、お構いなく。
「じゃあ、ここにいる人たち、みーんなクビにいたしましょう」
アドルフは呆気に取られ、間抜けのように口を開く。
さっさと廃妃にしてもらうため、好き勝手させてもらおう。
「ふざけているのか？　お前は」
「いえ、私はいたって真剣です。王宮の者を皆クビにします」
「なっ、なにをふざけたことを！　廃妃にするのだぞ！　それでもいいのか？」
「はい！　それを望んでおります」
気持ちのままに伝えたけれど、周囲の顔色は蒼白だった。
満面の笑みを浮かべた私と対照的に、アドルフがこれまでにない程に怒りを露にしているからだ。
「俺を愛し、王妃となったお前が……そのような態度を取るのか」
「えぇ、確かに貴方を愛していましたけど。もうその気持ちはありませんので」
公爵家に生まれた私と王家のアドルフは、幼い時から半ば強制的に顔を合わせていた。

長い交流の中で、確かに恋仲となって愛し合っていた。
十八歳で正妃となってからの三ヶ月は本当に幸せで……いや、もう思い出すのも不快だ。
だって、そんな過去を振り返っても、もう愛する気持ちは皆無だもの。
孤独に死ぬ未来を知ってしまったから、愛してもらおうなんて未練もない。
うん……晴れ晴れする程、アドルフへの恋情などない。
「ほら、このままだと王宮中の者をクビにしますよ。皆、いなくなってしまう」
「ふざけるな！　そのような勝手を許すと思っているのか！　お飾りの王妃が勝手をするな！」
「お飾りだと先程からおっしゃってますが、貴方が側妃と時間を過ごす間、私は貴方がすべき政務や外交などをこなしていたのですよ？」
彼の瞳が揺らぐ。……当然だ。
政務のほぼ全てを引き受け、最終的には玉璽（ぎょくじ）さえ私が押していたもの。
外交に関しても、もう何年も私しか他国の王族と交流していない。
彼の評判を上げようと各国の諸問題の解決に尽力していくうち……いつしか私がこの国の女王だなんて冗談で言われていた程だ。

そう、つまり……

「あれ、お飾りなのはもしかして……貴方では？」

「お、お前！　無礼だとわかって言っているのか？」

「はい、もちろんです。無礼でなくて、事実ですが」

「俺は本気だぞ、お前を廃妃にしても……なにも問題ない」

睨まれても、少しも怯えはない。むしろ笑ってしまう。

「だから、それを望んでいると言っているでしょ？　さっさと廃妃にしてくださらない？」

「本気……か？」

「ええ。ここまで言わせておきながら、まだみっともなく私にすがりたいの？」

「き……さま……！」

沸点に達したようだ。拳を握りしめた彼が叫ぶ。

王宮中に響きわたる声量で、王宮の部署長が集まる証人だらけの場で、私の望む言葉をくれた。

「貴様など、廃妃にしてくれる！　お飾りの王妃はこの国の害だ！　さっさと王宮を去れ！」

「はい、謹(つつし)んでお受けいたします」
背筋を伸ばし、王妃教育で習った礼をそつなくこなしながら、私は念願の廃妃を受け入れる。
満面の笑みを返すと、アドルフと周囲は混乱を隠せない様子だった。
だが、そんな反応を置き去りに、私は跳ねるように自室に向かった。
荷物は昨日からまとめていたから、すぐに整理し終わった。
「では、お世話になりま……いや、なってないですね。さよなら」
放心したようなアドルフたちには振り返らず、私は軽やかな足取りで王宮を後にする。
実家であるミルセア公爵家の当主、つまり私の父はこの判断を認めないだろう。
怒り狂い、勘当されるかもしれないが、それも好都合だ。
いっそ貴族のしがらみを捨て、一人で生きていくのも楽しそうだ。
あぁ、今はどのような未来でも楽しみだ。
王宮で冷遇され、死を願われていた時を思えば、なにが起きても幸せだ。
二十五歳で病死するまでの三年間、無限の選択肢が広がっている。
私の未来は、とても自由で……楽しみしかない。
何者にも縛られず、自身の幸せだけを追い求めて充実した人生を送ってみせよう。

一人で生きる方法も、模索すればきっとあるはずだ。

◇◇◇

めでたく廃妃となった私は、馬車を乗り継いで実家のミルセア公爵邸へ帰還した。
目の前に広がる懐かしい景色に、帰ってきた実感が湧く。
しかし……当然、父が私を許すはずはなかった。屋敷に帰還して早々に書斎に呼び出される。
「なにを考えているんだ、カーティア。廃妃を受け入れたなど……ふざけているのか⁉」
父が机を強く叩き、大きな音が鳴り響く。
控えている家令の肩が跳ねたけど、当の私は窓の外でひらめく蝶を目で追っていた。
「聞いているのか⁉　カーティア！」
「へ、あぁ。聞いておりませんでした、お父様」
「お、おま……わかっているのか、お前は我がミルセア公爵家の家名に泥を塗ったのだぞ！」

「お父様、私は王宮にて陛下からの寵愛を失い、冷遇という言葉が相応しい扱いを受けておりました。もう何年も……」

「そんなことは知っている！　だが、その程度で挫けてどうする！　お前には公爵家の娘として、たとえ血反吐を吐いてでも王妃の座を死守する義務があるのだぞ！　感情などぞ捨てろ！」

あぁ、父は私の扱いを知っていてなお、助けてはくれなかったのね。

まぁ、当然か……父にとって私は政略の駒、権力闘争の益になればそれでいいだけの存在だ。

亡き母と違い、父からは塵程の愛ももらわなかったから、今更悲しくはない。

「お父様、いくら喚いても私が廃妃となった事実は変わりません。気に入らぬなら、罰してください。喜んでお受けしますわ」

ミルセア家と縁を切れば、気楽な生活にまっしぐらだ。喜んで引き受けたい。

むしろ、こちらから勘当を願うべきだろうか？

「ふん、お前が生意気を言うのであればそうしてやろう。五日の期間をやる。それまで震えて待て。もし反省の弁を述べるなら、それまでに……」

「五日……わかりました。ではお母様が残した蔵書は私がいただきますね。それでは」

「は……カーティア、ま、待て！」

今すぐでもよかったけれど、せっかく五日間の猶予ができたのだ。有意義に使おう。

父の制止を無視して書斎を出て、お母様の部屋へ向かう。

母は身体が弱く、私が八歳になる頃に亡くなった。しかし、いただいた言葉は今も私の中に残っている。

『カーティア、本は……まだ見ぬ世界、知恵を与えてくれる。読み、学べば、人生はきっと充実するはずよ』

新たな人生を送ろうとしている今の私にとって、母の蔵書は参考になるだろう。

残された本の種類は様々だった、難しい医学書、農学書、薬学書。

その他にも、才能ある者しか使えぬ魔法学書や、母の秘蔵のロマンス小説など……

そのどれもが新鮮な知識と物語で、私は寝る間も惜しんで読みふけった。

父の嫌がらせで、私の世話をする者は誰もいなかったけど、一人には慣れているから問題ない。

王妃だった頃と違って時間を好きに使えるから、本を夜更けまで読み続けられる。

怠惰に過ごす日々は、本当に幸せで……あっという間に五日が経った。

母の蔵書をあらかた読み終えて、蓄えた知恵を実践に移したい気持ちが沸き立って

いる。
農地で作物を育てて過ごすのは楽しそうだし、薬学や魔法学も……三年後に備えて学ぶべきよね。
ワクワクと期待に胸を膨らませていると、父の怒声が響いた。
「カーティア！　書斎に来い！　話がある！」
あぁ、父との話が残っていたことを忘れていた。
さっさと終わらせようと、足早に父の書斎へと向かう。
「カーティア、お前は反省の言葉を……一度も述べに来なかったな」
「そのようなことを期待されても困ります。私は反省などしておりませんもの」
「ぐっ……なら、もう今までのような豪華な暮らしはできぬ覚悟はあるのだろうな？」
「あら、食事は硬いパンのみ、冷水で身を洗う日々よりも貧しくなるのなら、むしろ楽しみです」
「こ、この……」
「さぁ！　どうぞ私を勘当してください」
「なら望み通り！　お前は勘当だ！　王妃でなくなったお前は公爵家の恥！　消えよ！」
机を殴りつけ、父は力の限り叫ぶ。

その視線や声に、私を娘だと思う気持ちは見当たらない。あぁ、それは最初からだったか。
なんにせよ、父自ら親子の縁を解消してくれたのだから、異論などない。
「喜んでお受けします。ミルセア公爵様」
「お前……どのように生きていく気だ」
「し、失礼します！　旦那様！」
父……いや、ミルセア公爵の言葉を遮り、家令が駆け込んできた。酷く焦っているようだ。
「何用だ」
「じ、実は……客人が来ております……そ、それもカーティア様に」
「カーティアに？　帰せ！　もはや娘でもない者の客人など家に招くな！」
「そ、それが……きゃ、客人というのは……」
どもりながらも家令は客人の名を告げる。
その名を聞き、流石に私も動揺を隠せなかった。この場にいるはずのないお人だったからだ。

慌てて出迎えの準備を済ませ、応接室に向かう。
「お待たせしました……シュルク殿下」
「いや、こちらこそ急な来訪で申し訳ない。カーティア王妃。いや、もう違うか」
「既にご存知でしたか。どうぞ殿下は気楽にカーティアとお呼びください」
彼はシュルク・カルセイン。グラナート王国の西に面する大国、カルセインの第一王子だ。
そんな彼が他国の、一端の公爵邸に来訪するなど、異例中の異例といえる。
それに、私と彼は国交のためにほんの数回お茶をした程度の仲でしかない。来訪の理由はなんだろうか。
「それで……殿下のご用件とは……？」
「前置きは必要ないね、単刀直入に言おう。君に結婚を申し込みに来た。僕が次期国王となるため、他国から信も厚い君に、ぜひ僕と共に国政を――」
「……あぁ。申し訳ありませんが、お断りします」
礼儀など気にせず、きっぱりと断る。
私は、残りの人生を面倒なしがらみに囚われたくない。
政略の道具になることも、巻き込まれることもごめんなのだ。

たとえ相手が大国の王子でも、その意志は変わらない。
話を遮るように断ったけれど、シュルク殿下は笑ってくださった。
私と彼の立場には天と地程の差があるのに、その気安い反応は意外だ。
農地に恵まれた大地を有し、魔法学の技術を発展させたカルセイン王国は、かつてグラナート王国周辺で長く続いた戦争を終わらせた過去を持つ。
それは、皇帝の統治のもとに多くの人口を有し、圧倒的な軍事力を持つアイゼン帝国と、百年前に停戦条約を結んだことがきっかけだ。
他よりも圧倒的に抜きん出た二国間の停戦を機に、各国の争いも絶えた。
そして、その二つの大国に挟まれているのが私の住むグラナート王国だ。
位置関係もあり、我が国は大国同士の橋渡しのような存在を担っている。私はその第一人者だった。
建前上は対等だが、歴史的な関係からグラナート王国はカルセイン王国に逆らえない。
なのに私の無礼に怒りもせず、シュルク殿下は話を続けた。
「駄目かな？　カーティア、君が築き上げた信頼……僕は正当に評価するし、望むのなら愛も与えます」
「シュルク殿下、ありがたいお言葉です。しかし……もう私にはどれも必要ないもの

です」
「どうしても駄目だろうか？」
「……申し訳ございません。でも、どうしてそこまで私を評価してくださるのですか？」
シュルク殿下はくすりと笑う。
「数年前のカルセインでの交流会、君は我が王との謁見の際に言っただろう？　魔法学の学び舎の門戸を広げ、様々な意見を取り入れるべきだと」
「そ、そんなこともありました……ね」
「現王はそれを実践し、魔法学園を平民にも解放した。すると、平民から抜きん出た才能の持ち主が数多く現れ、魔法学は大きく発展した。それもあり、我が国は君を高く評価している」
確かに過去にカルセイン王へ提案したことはあったが、まさか実行してくださっていたとは……
「評価していただけるのはありがたいです。殿下からの婚約の申し出も、喜びで胸を満たされました。しかし、私はもう政略の中に身を投じる気はないのです」
「そうか……いや、僕が悪かった。君を無理に継承権争いへ巻き込もうとしていた」
シュルク殿下には腹違いの兄弟が何人もいて、王位継承権を争う政敵が多い。

継承戦のため、私に声をかけたのだろうけど、面倒事はごめんだ。
その後も、シュルク殿下とは気さくに会話を続けた。
私が気に病むことがないよう、明るく接してくださったのだろう。
しかし、その朗らかな空気を乱す者が部屋の扉を開いた。
「失礼します。シュルク殿下……我が娘と懇意にしていただき、ありがたく思います」
……ミルセア公爵（元父）だ。
シュルク殿下と和気あいあいと話している様子を見て、恩恵にあずかろうとしたのだろう。
勘当したはずの私を娘と呼ぶとは、どうやら彼には恥などないようだ。
「ミルセア公爵、この場をお貸しいただいていることには感謝いたします。しかし私はもう勘当された身、娘ではありません」
「カ、カーティア。殿下の御前なのだ、そのような話は後に」
「おや、勘当を……？　それは惜しいことをしましたね、ミルセア公爵」
シュルク殿下は私にいたずらっぽく微笑むと、ミルセア公爵を見て目を細めた。
「僕だけでなく、彼女の身を案じている国や、影響力を取り入れたい国はもう既に動き出しております。そんな彼女を勘当したとは……」

「あ、あぁ。カ、カーティア……さっきの話だが、どうかもう一度話し合いを……」
「ミルセア公爵、貴方が言ったのでしょう？　もう終わった話など蒸し返さず、ご退室を」
ミルセア公爵は肩を落とし、「失礼しました」と、哀愁の漂う背を向けて部屋を出た。
「よかったのかい？」
「ええ、彼は私を政略の駒としか見ておりませんので」
もう政略の渦中からは離れて生きるのだ。家の望む駒になるつもりはない。
しかし、シュルク殿下は私を過大評価しているようだ。他国が私のために動くはずがないのに。
「しかし、君はいい意味で変わったね」
「え……そうでしょうか？」
「あぁ、前はまるで……誰かに認めてもらいたいと、焦っているように見えたから」
確かに、私は焦っていたのかもしれない。他国の問題にも積極的に介入し、解決に少なからず貢献できていたと思う。
全ては、アドルフに振り向いてもらうための努力だった。しかし今は、そんな焦りは微塵もない。

そのことを、シュルク殿下は見抜いたのだろう。
「今はただ、自由に生きていたいのです」
せっかく手に入れた二度目の人生、縛られる生活など二度とごめんだ。
「自由に……か。今日は難しいかもしれないよ？」
「へ？」
素っ頓狂な声を出した私を、シュルク殿下が窓の近くで手招く。
何事かと近づくと、彼は外を指さして笑った。
「言っただろう？　各国が君の身を案じて、引き入れたがっていると……僕は一番乗りなだけ」
「……嘘」
窓の外に見えたのは、煌びやかで豪奢（ごうしゃ）な馬車の群れだった。
「君がもう政治から遠ざかると聞いて安心した。他国に君の影響力が渡ることを危惧していたが、杞憂に終わりそうだ。それでは、振られた僕は先に失礼するよ、ここは騒がしくなる」
呆然と立ち尽くす私を置いて、シュルク殿下は部屋を出ていってしまった。
「困ったことがあれば、いつでも頼ってくれ」と微笑みを残して。

外にいる方々はお世話になった他国の重鎮ばかり……無下になどできるはずはなかった。

◇◇◇

入れ替わり立ち代わりで訪れる来訪者への対応で、目まぐるしい一日だった。

彼らの要件は婚約の申し出や文官への推薦で、もう政治に関わりたくない私は全てを断った。

しかし、まさかここまで評価してもらっていたなんて。

「なにか困りごとがあればいつでも頼ってください。貴方には多くの助言をいただいた」

「カーティア様には、我が国の食料問題改善に手を貸していただいた。ご恩をいつか返させてください」

せっかくの申し出を断っているにもかかわらず、来る人は皆がお礼を言って去っていった。

以前はアドルフしか見ていなくて気付かなかったが、私は鈍感だったようだ。

他国の方々に、私は想像以上に愛されていたのかもしれない。

「それでは、カーティア様。貴方に祝福を」

「えぇ、ありがとうございます」

最後の来訪者が去っていくのを見送り、大きく息を吐く。

ようやく終わったと思った時には、既に夜中となっていた。

「さて……出ていかないと」

外の夜闇を見つめながら呟くと、意気揚々とした声が返ってきた。

「いやぁ、カーティア。事前に相談してくれていれば、廃妃には賛成だったぞ……仕方がない、また我が家の娘に戻るといい」

「……」

「本当はお前が冷遇されていたことに心を痛めていたんだ。また親子に戻って、じっくりと新しい婚約者を選定しようじゃないか」

ミルセア公爵……ある意味で尊敬の念すら抱く。彼に恥という概念はないのだろうか。

「ミルセア公爵、私に媚（こび）を売っている場合ですか？」

「カーティア、父と呼んでくれ。ここを出ていけばきっと後悔するのだから。言うことを聞きなさい」

「後悔ですか……ところで、来訪してくださった皆様には、私が王宮で受けた仕打ちや、貴方に勘当されたことは全て明かしました。非難の声明を出してくださるそうです」
「は……な、なにを……お前はなにをしたのかわかっているのか⁉　王に仕える公爵家としての責任を……！」
「その公爵家から追い出したのは、どなたでしたっけ？」
「な……あ……おま」
「おや？　後悔するのはミルセア公爵の方でしたね？」
「ま……まま……待て！　ゆ、許してくれ、カーティア」
「いやに決まっております」
さぁ、もう屋敷を出て、好きなことだけして生きられる場所を探そう。
いたずらに時間を消費すれば……この件を聞いたアドルフたちがなにをしてくるかわからない。
そう考えていた時だった。
「あ……あの！　カーティア様。よ、よろしいでしょうか？」
今日で何度目になるだろうか、家令が焦った様子で駆け込んできてため息がこぼれた。
「また来客ですか？　申し訳ありませんが、夜も遅いのでお断りを……」

「その、アイゼン帝国の方です。そ……それも……宰相様です」
「これは……また……」
最後の最後で、シュルク殿下と並ぶ程のお客様がやってくるとは。
アイゼン帝国の宰相といえば、皇帝に次ぐ権力者だ。
「わかりました。応接室へ案内してください」
慌てて去っていく家令を見送り、私はミルセア公爵に向き直る。
「ミルセア公爵、これ以上のお話は時間の無駄ですので、ご退室を」
「許してくれ、父を……救ってくれ」
「出ていきなさい。帝国にまで貴方の醜聞（しゅうぶん）を広げてほしいの？」
「ひ……」
低い声で脅すと、そそくさとミルセア公爵は出ていった。
シュルク殿下と面識のあったカルセイン王国と違い、アイゼン帝国は国際交流会にさえ文官しか出席しない閉鎖的な国だ。交流は乏しく、内部の情報は少ない。
帝国の宰相様が、一体私になんの用なのか。
「入ってよいだろうか」
「……どうぞ」

入ってきたのは、見上げる程大きな体躯の偉丈夫だった。歳は、私よりも二十は上だろうか。

「夜遅くの来訪で申し訳ない。お初にお目にかかります。……アイゼン帝国にて宰相を務める、ジェラルド・カイマンと申します」

「カーティアです。ジェラルド様」

カーテシーをした際に、ジェラルド様の外套の下に漆黒の鎧が見えた。

上手く隠してはいるが、腰には剣を差している。

アイゼン帝国は軍事力に優れていると聞くが、宰相様まで武装しているとは驚きだ。

「それで、ジェラルド様。本日はどのようなご用件でしょうか」

「あぁ、早速ですが本題に入りましょう。カーティア嬢、実は貴方に縁談を持ってまいりました」

またか……断りの言葉を考えないと。

内心ため息を吐いた時、ジェラルド様はこう言った。

「少々特殊な縁談となりますが、カーティア嬢の自由と、望むものを与えることを約束します」

含みのある言葉に、思わず問いかける。

「特殊な縁談……とは？」

「我が皇帝と、愛なき偽装結婚をしていただきたい。代わりに自由を約束いたします。政務もなにもしなくていい。望むなら土地も用意しましょう」

愛のない結婚。政治にかかわる義務はない。つまり……面倒なしがらみはないということ？

それに加えて、自由と私だけの土地をくれるなんて。

それは少し……いや、かなり興味を惹かれてしまう。

「お話を、聞かせていただけますか？」

再び漏れ出た問いかけに、ジェラルド様は丁寧に答えてくださった。

ジェラルド様から聞いた話をまとめると、アイゼン帝国の皇帝――シルウィオ・アイゼンは今年で二十五歳になるが、いまだ未婚であった。それには彼が公言した言葉に理由がある。

「誰かを愛する気も、子を作る気もない」……と言ったのだ。

それを聞いた貴族たちは当然、娘を皇后にしようとは思わなかった。娘が皇后になっても子を生せず、皇帝の寵愛すらないのなら、身を引くのは当然だ。

更に、シルウィオ皇帝は戴冠式の前に、自分以外の皇位継承権を持つ者を帝都から追

放した過去がある。
その件も相まって、機嫌を損ねれば家ごと追放されると、誰もが彼を恐れた。
そして月日が流れ、国内では未婚の皇帝に不信感が募っている。
それらを解消するためにも、愛のない結婚を受け入れる女性を探していたようだ。
「と……いうことなのです。形だけの皇后として、我が国へ来てくださいませんか」
「……どうして私がその候補に？」
「廃妃となったカーティア嬢は自由を望むと聞きました。それに、皇后になっても貴族たちが異を唱えられない程に他国からの信も厚い。これ程都合のいい女性はおりませぬ」
五日前に廃妃となった件だけでなく、既に経緯まで調べあげているようだ。
帝国が持つ情報網が恐ろしい。
「ほ、本当に形だけの皇后でもいいのですか？」
「はい。対価として、自由な生活をお約束します。帝国民を安心させるためのお力添えを願いたい」
正直に言えば、かなり迷っている。本来であれば、他の国と同じく断るべきだ。
しかし、帝国で本当の意味でのお飾りの后になれば……あとは望む自由が待っている。

その魅力的な条件に、質問を重ねていく。
「あの、土地というのは実際にはどれ程……」
「流石に城内には住んでいただきたいが……庭園は広いので、それなりの土地を扱えるはずです」
「で、では……農地を作っても？　薬草の研究もしたいので、それらも植えたいのですが」
「へ？　の、農地？　や、くそう？」
「はい!!」
「そ、そんなものでいいのですか？　望めば金でできた宮も、ドレスも宝石も用意しますが……」
「そんなつまらないものはいりません。私には自分だけの僅かな土地があれば充分です」
「つまら……なんと……」
ジェラルド様は驚きで言葉が出ないようだ。
これは……もしかして、本当に希望通りにいくかもしれない。
現状、帝国に嫁ぐことにメリットしかない。悠々自適に過ごせて……皇后になれば、

グラナートに無理やり連れ戻される心配もない。
これは、かなりいいお話なのでは？
「ジェラルド様、もう一つお聞きしてもいいですか？」
「なんでしょうか」
「結婚した場合、政権争いに巻き込まれる可能性はありますか？」
ジェラルド様は頬に笑みを刻んで、首を横に振る。
「ご心配なく。我が陛下に逆らう者などおりませぬ。皆……首は繋がっていたいですから」
「それは……私の身は、安全なのですか？」
「ええ、貴方には庭園に設けた離宮に住んでいただきますので。陛下と会うことはそうありません」
心配はあるが、今は他に行く当てもない。
二度目の人生を自由に過ごす。その夢に最も近い誘いがきて、断る理由もない。
都合のいい話には乗っかる方がいい。もし帝国で面倒事に巻き込まれたなら、逃げ出してしまえばいいのだ。
うん、そうしよう。よし！　決めた。さっさと行こう！

「承知いたしました。お話をお受けいたします」
「っ!!　ありがたい。それでは準備もあるでしょう、二十日後には迎えを」
「いえ、ジェラルド様。そのような時間はありませんよ！　今すぐに向かいましょう、すぐに連れていってください！　思い立ったが吉日！　さぁ、早く！」
「は？　準備はいいので？　荷物も……」
「そんなもの、既にまとめ終えております」
にこやかに答えれば、ジェラルド様は呆気に取られていた。
まさか、出ていく間際だったとは思っていなかったのだろう。本当に都合がいい。
「いいのですか？　この国に未練や……別れの挨拶などは」
「そんなもの……」
この屋敷で育った幼少期、王宮での生活……彼と過ごした日々、お父様との生活……思い出しても……腹立たしい記憶しかないじゃないか。
清々しい程に未練がない。
こんな国は捨てて、さっさと出ていこう。
「ありません。行きましょう！」
「え、えらくあっさりと……わかりました。では荷物を持って、外に停めた馬車のとこ

立ち読みサンプルはここまで